表現する力を育てる創造的な音楽活動

― 音楽づくり・創作活動を通じ，仲間とのかかわり合いの中で思考力・判断力・表現力を育てる ―

1．音楽科で願う豊かな学びの姿

平成18年度より幼小中一貫教育を進める中で，改めて日々の授業や校内音楽会などの音楽活動における子どもたちの様子を概観したとき，発達段階において次のような姿を見ることができた。

段階	子どもたちの様子
初等部前期	・言葉に自分で節を付けたり，蝶を見て「ちょうちょう」を歌ったりする姿 ・見つけた遊びの中で楽器遊びをする姿 ・自分の気持ちを自由に表現する姿 ・無邪気に大声をはりあげて歌う姿 ・友だちの打つリズムを真似る姿 ・音楽に合わせて体を動かしながら歌う姿 ・口を大きく開けてのびのびと歌う姿
初等部後期	・友だちと一緒に声や音を合わせて楽しむ姿 ・音や音楽に耳を傾け，想像しながら鑑賞する姿 ・ソプラノリコーダーに興味をもち，一生懸命練習する姿 ・リコーダーを友だちに教える姿 ・美しい声にあこがれをもちながら，曲にひたって歌う姿
中等部	・音や音楽を聴いて直感的に感じたことを言葉にして伝え合う姿 ・ハーモニーに耳を傾け，その心地よさを感じながら歌い合う姿 ・声の響きやハーモニーを確認しながら自由な雰囲気の中で歌い合わせることを楽しむ姿 ・より響きのある歌声を求めて練習する姿

また，授業の枠を超えて，休み時間などにも音楽を楽しむ姿や音楽に親しむ姿が見られた。例えば，移動教室の際に友だちと一緒に廊下を歌い合わせながら歩く姿や授業前に友だちが弾くピアノの周りに集まってその演奏を聴いている姿などが見られた。さらに自己の確立とともに自分と音楽のかかわりを発見し，将来的にも楽しんでいこう，音楽にかかわる道に進もうとする生徒も多く現れるようになった。

そこで，このような子どもたちの姿をもとに音楽科で願う豊かな学びの姿を次のようにとらえた。

【音楽科で願う豊かな学びの姿】

○音楽活動に進んで取り組もうとする姿
○仲間と一緒に楽しく活動しようとする姿
○音楽活動の楽しさや感動を味わおうとする姿
○表現や鑑賞に必要な知識や技能を身に付けようとする姿
○よりよい音楽表現にするために工夫しようとする姿
○音楽を生活の中に取り入れようとする姿

2．昨年までの研究の経緯

(1) 実態の把握と課題の設定

平成18年度は，まず本学校園の幼稚園のくらしや小中学校での音楽科の授業，音楽にかかわる児童・生徒の様子を概観し，園児・児童・生徒の音楽に関する現状の把握とそこから見えてくる課題を探ることから始まり，それを受けて次のような点を大切にしていこうと考えた。

○基礎基本の確実な定着と音楽を愛好しようとする心情を大切にして伸ばす。
○一貫教育のカリキュラムの中では児童・生徒が上学年の生徒にあこがれや夢をもてるような場を設定する。特に幼稚園においては，小学生・中学生の音楽活動を見たり聴いたりする機会をもち，豊かな感性をもったり，あこがれの気持ちをもったりできるようにする。
○表現することが楽しい，自分の表現を見たり，聴いたりしてもらうことがうれしいと思えるような経験を幼児期から積み重ねる。
○友だちや下学年，上学年の演奏を聴きながら，認め合い，励まし合い，高め合うことのできる児童・生徒を育てる。
○優れた芸術に出会ったときに，そのよさに共感し心が揺さぶられるような確かな感性を育てる。
○音楽に関わる学校行事（音楽会や鑑賞会等）を大切な柱としてとらえ，幼小中間の教諭，児童・生徒の相互交流を計画的に実施する。
○児童・生徒の発達や実態に即して，子どもたちの関心をひきつける授業展開・指導カリキュラムを開発するとともに，児童・生徒の興味関心を大切にした教材選択や選曲をし，生き生きとした授業展開をめざす。そのために附属校間の鑑賞資料や楽器・楽譜等を整理し，相互に連携・連絡しながら系統性のある資料を整理・管理する。　「H18幼小中一貫教育を語る会（島根大学教育学部附属学校園）」より

(2) 具体的な取り組み

①11年間を見通した題材配列の検討

子どもの発達段階を考慮するとともに，新学習指導要領の内容を踏まえながら整理・工夫した。

②中学校教員の小学校6年生への乗り入れ授業の実施

小学校6年生の音楽科の授業を年間通して中学校教員が行なった。

③幼小・小中の合同学習・交流活動の実施

教育課程の改訂にともなって，これまで下記のような取り組みを行なった。

- 小学校2年生のミニコンサートを幼稚園児が鑑賞
- 低学年の校内音楽会リハーサルを幼稚園児が見学
- 小学校4年生と中学校2年生選択音楽によるリコーダーアンサンブルの授業
- 中学校3年生選択音楽によるミニコンサートを小学校6年生が鑑賞
- 中学校の校内音楽会に小学校6年生が参加

④「歌唱」に焦点をあてた11年間の大切にしたいこと・育てたい力のイメージ図の作成

平成20年度は，「歌を愛好する心情と歌で表現する力を育てる音楽活動」を研究テーマとして，＜表現力＞をキーワードに「歌唱」に焦点をあてて取り組んだ。その中で発達段階に応じた子どもの学びをとらえることを大切にし，以下の2点を研究の視点として取り組んだ。

○一貫して育てたい力の育成をめざして，子どもをどうとらえていくか
- 子どもの興味・関心や学習体験をとらえる。
- 子どもの思いや願い，表現の工夫のよさをとらえる。

○学びの自覚をどうとらえ，どう生かしていくか
- 時間ごとのふりかえりや自分の表現を聴く場とお互いの表現を聴き合う場を設定する。
- 教師によるとらえを子どもたちに積極的に伝える。

子ども自身がハーモニーや声の響きなどを客観的に見つめていく営みを充実させ，そして正しい音程で歌えた，ハモることができたなどの場面を大切にし，その瞬間に感じた子どもたちの気持ちが次の学びの豊かさにつながっていくと考えた。

以上のような取り組みを行う中で，11年間一貫して大事にして育てていきたいことを次のようにまとめた。

無邪気に音楽を楽しみ，心をわくわくドキドキさせ，あこがれをもって「音楽っていいなあ」「表現するって気持ちいいなあ」と純粋に感じる心と豊かな表現力を育てる。

3．本年度の研究の視点

⑴ 思考力・判断力・表現力を明らかにする

①音楽科としての「思考力・判断力・表現力」とは

新学習指導要領では，音や音楽を知覚し，そのよさや特質を感じ取り，思考・判断する力の育成を一層重視することが改訂のポイントの一つになっている。本学校園音楽科では，新学習指導要領の内容を深く読み取り，領域（歌唱・器楽・創作（音楽づくり）・鑑賞）ごとの表にまとめていく作業を行なう中で，音楽科における「思考力・判断力・表現力」を次のようにとらえた。

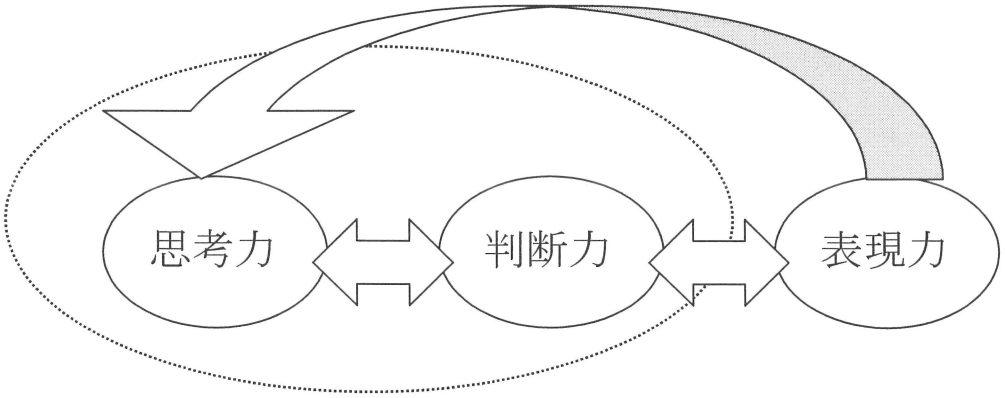
◎思考力「イメージする・理解する」
　「音（音楽）を聴いてイメージをふくらませる」「楽譜を見て理解する」など
◎判断力「選ぶ・工夫する・修正する・感受する」
　「音素材や音楽を形づくっている要素を選ぶ」「表現を工夫する」など
◎表現力「生かす・表現する」
　「音楽を形づくっている要素を生かす」「思いや意図を演奏や言葉で表現する」など

「思考力」とは一般的に論理的思考力（物事を論理的に考える力）ととらえられることが多い。しかし，「思考力」には創造的思考力もある。創造的思考力とは一般的に流暢性（考えをすらすらとよどみなく作り出す），柔軟性（いろいろな角度から柔軟に考える），独創性（新奇な考えを生み出す）を中心として，応用性，構想性，敏感性を兼ね備えた「考える力」のことである。まさに発想力・想像力（イメージ力）に通じ，音楽科でいう「思考力」とは創造的思考力の関与するところが大きいと考える。

「判断力」は，イメージしたものを表現へとつなぐ役割を果たしていると考える。イメージしたものを表現するために，どの音素材や音楽を形づくっている要素を用いるか選び，工夫し，修正する力であると考える。また，ある音や音楽を聴き，イメージをふくらませる（思考する）中で瞬時に自分なりにその音や音楽を感受する（判断する）ことが多々ある。このように思考と判断は分かれることなくひとまとまりでくくることができるとも考える。

「表現力」は，技能的側面を用いながら判断した音素材や音楽を形づくっている要素を生かし，思いや意図，イメージを表出していく力であると考える。

「思考力・判断力・表現力」のサイクルは，「思考力」から「表現力」への一方通行ではないと考える。例えば，あるイメージ（思考）を表現（表現）するためにフォルテ（f）を用いて（判断）演奏（表現）した場合，さらにイメージや思いがふくらむことがある。この場合，サイクルは「思考→判断→表現→思考」となる。また，あるイメージ（思考）を表現（表現）するためにフォルテ（f）を用いて（判断）演奏（表現）してみたが納得できる表現にならず，修正しメッゾピアノ（mp）で演奏してみたら納得できる演奏になった，ということもあるだろう。この場合，「思考→判断→表現→判断→表現」となる。このように「思考力・判断力・表現力」のサイクルは，それぞれの間を行き来しながらより高い段階へと発展していくものと考える。



(2) 思考力・判断力・表現力を育てるかかわり合い

音楽科の学習形態は，合唱や合奏などのように個人が習得した知識や技能を集団で活用して高めていくような形態で行なう場合が多い。ある音や音楽を聴いたとき，個人がイメージするものは様々である。それを個人のレベルでとどめたとき，さらにイメージがふくらむ（発展する・高まる・深まる）ことは少ない。しかし，お互いのイメージを伝え合ったとき，各個人の中でさらにイメージがふくらんでいく（発展していく・高まっていく・深まっていく）ことがあるだろう。また，お互いの思いや意図，イメージ，感想を伝え合うような場面ではなく，友だちと一緒に活動（演奏）をしているときに自ら気付き自ら修正し高まっていく（高まっていこうとする）場合がある。例えば，合唱や合奏をしているときに，自分の強弱と友だちの強弱との違いに気付き，合わせようとして自ら修正することがあるだろう。これは，コミュニケーションなどによる直接的なかかわり合いではなく，お互いの発している音を聴き合うというかかわり合いをしていることになる。

このような場面をもとに音楽科における思考力・判断力・表現力を育てるかかわり合いを次のようにとらえた。

【思考力・判断力・表現力を育てるかかわり合い】
◎思いや意図，イメージ，感想を伝え合う
◎自分の発している声や音と他者の発している声や音を聴き合う
◎自分の発している声や音と他者の発している声や音を重ね合う

音楽科の授業は，他者とかかわらずには学習が進まない，深まらない場合が多い。そこで大切なことは，かかわり合いの有効な手立てを探ることである。

以上のことを踏まえて，思考力・判断力・表現力を育てる学習の展開や形態などについて「かかわり合い」に視点を置いて取り組んでいきたい。

特に本年度は，創作活動に焦点をあて，11年間を見すえてかかわり合いを大切にした指導のあり方を研究していきたい。初等期前期ではリズム中心の音楽遊びから，初等期後期ではそれをつなげたり重ねたりするとともに，音楽的な構成も大事にしながらの音楽づくりへと発展させたい。さらに中等期では旋律や和声も考えた創作へと発展させていきたい。試行錯誤したり，友だちとの意見交換から新たな気付きが生まれたり，お互いの思いや意図を共有したり共感したりしながら，表現したい思いや意図を音へ，そして音を音楽へと一つの形あるものへと練り上げていく，こうした過程を大切にしていきたいと考えている。

具体的には，友だちのリズムを真似したり，イメージしたことをペアまたはグループで伝え合ったり，話し合ったりというようなかかわり合いをくり返し設定していく。子どもたちのかかわり合いをより深いものにするために，共通のイメージをもたせたり，共通の音楽要素を設定させたりして，子どもたちが何を工夫すればいいのか，明確にすることを大切に取り組み，子どもたちの思考力，判断力を高めて行きたい。

（文責　小村　　聡）